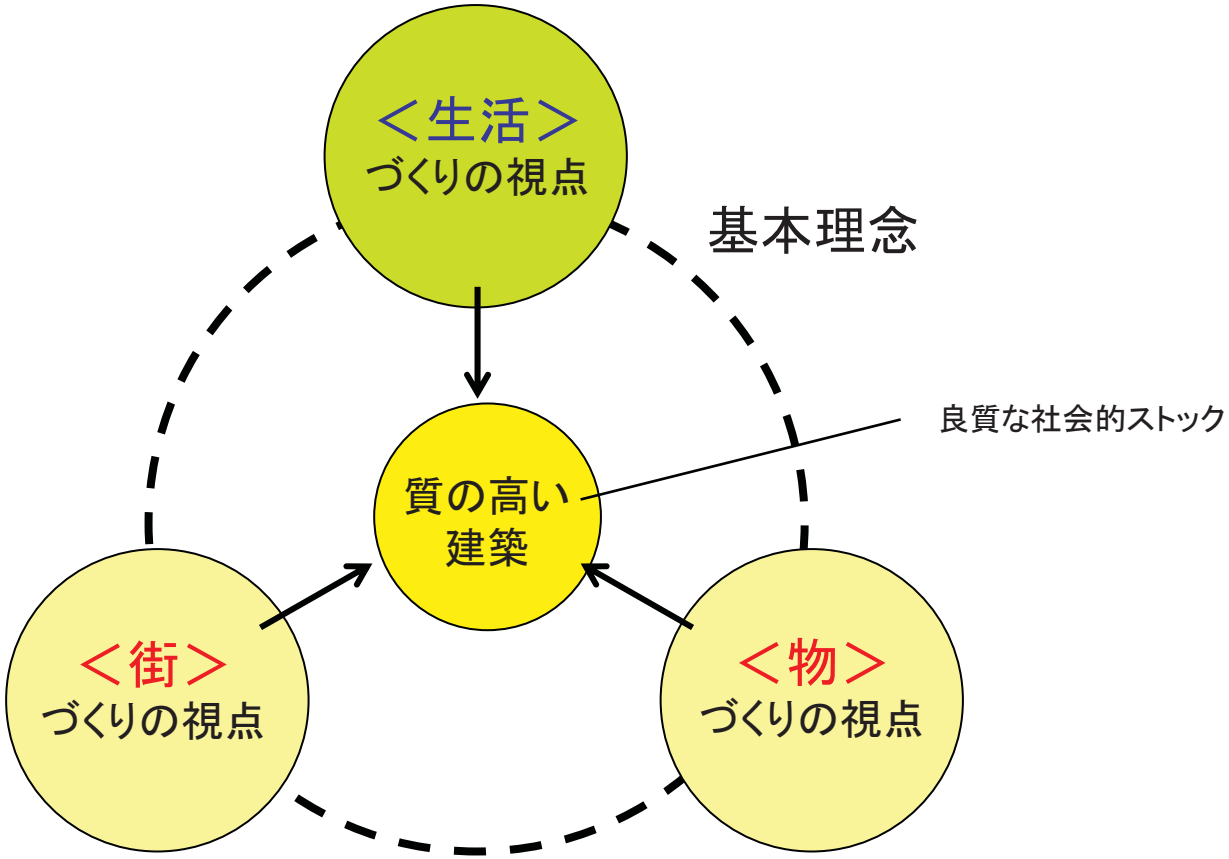
平成20年度　建築基準整備促進補助金事業

20.建築の質の向上に関する検討

生活者参加による質の高い建築づくり作法の事例研究調査

社団法人　日本建築士会連合会

● 質の高いまちづくりに向けての基本的考え方



＜生活＞づくりの視点から見た
生活者参加の「発見的ワークショップ」の提案

建築士会「生活づくり制度部会」で、
生活者の視点に基づいて実現した事例収集

↓

生活者の視点を取り入れる具体的な手法の検証

↓

「発見型ワークショップを実現するための11の作法」

発見型ワークショップを実現するための

１１の作法

作法ー1

参加者がお互いの立場の違いを発見する

発見型ワークショップでは、さまざまな立場の人に参加してもらうことが必要である。その立場の違いを尊重することが参加、協働の原則となる。

発見型ワークショップは、さまざまな立場の人が参加し、お互いの意見の違いを発見することから始まると言える。実際、参加者の感想カードに残された「いろいろな意見が聞けてよかった」という言葉は、最も多く見られる意見の一つである。参加者同士がそれぞれの考え方を理解し、お互いに学び合うプロセスの中にワークショップの創造的な合意形成の秘密が隠されている。

作法ー2

暮らしの課題を発見する

計画対象地域でのくらしの実態を捉え、課題を発見することが計画づくりの端緒となる。

計画対象地域でのくらしの実態を捉え、その地域での課題が何であるのかについて、様々な視点から考える事は、計画づくりの出発点である。世代ごとに抱える課題の掘り起こし等には、ワークショップにおいて参加者の身近かな実感を伴う意見の収集が必要である。参加者相互では互いの意見の発表を通じて自らの地域の暮らしの課題についての認識の共有ができることが計画づくりのプロセスにおいて大きな意味を持つ。

作法ー3

敷地やその周辺の場所の力を発見する

計画施設の敷地やその周辺の地形、自然条件、水系、植生、風向き、日当たり条件など、その場所に固有に備わっている力を探し出すことが重要である。

建築は、世界にひとつしか無い土地の上に、ある機能を満たすための空間を様々な人の力を結集しながらつくり上げていく総合的な行為である。したがって敷地や敷地周辺の状況に関しては入念な調査が必要である。敷地、及び其の周辺の地形、水系、水の流れ。気候条件(気候ゾーン)、植生。風の向きや日当りの条件など、その場所に固有に備わっている力を探し出すことが必要である。この場合定量的、客観的データーは大きな特徴を捉える段階では有効であるが、即地的なミクロな状況に関しては、フィールドワークを重ねたり、地域の住民に直接聴き取りを行うことが有効である。

作法―4

まちの潜在的資源を発見する

そのまちに受け継がれてきた生活の知恵や作法、有形・無形の伝統文化、ものづくりの技術、固有の素材、町並みの構成など、敷地に潜在する様々な資源を発見し、地域に住む人たちとそれらを共有することが重要である。

その地域に受け継がれて来た生活の知恵や作法、共同体としての約束事、有形・無形の伝統文化、ものづくりの技術、地域固有の素材、まちなみの構成や意匠など、は時代の変化、くらし方の変化とともに見えにくくなっている。それらについて、地域に住む人達と丁寧に発掘作業に取組み、その価値を再考し、共有することが重要である。その作業を通して、その地域独自の建築づくりの拠り所となることの発見につながり、地域独自の質の高い建築の実現の可能性を持つことになる。

作法―5

みんなのいろいろな思いを発見する

それぞれの人が持っている地域への思いや施設に対するアイデアなどを出し合い、重ね合わせることで、より優れた計画が可能となる。また、その情報を発信し、共有し、育てていくことが重要である。

体験や事実を発見することに比べると、“思い”を発見することは簡単ではない。既成概念にとらわれていたり、抽象的な言葉しか浮かばなかったりする場合が多い。できるだけ具体的に、それぞれの人が持っている地域への思いや施設に対するアイデアなどを出し合い、重ね合わせることで、より優れた計画が可能となる。その情報を発信し、多くの人と共有し、育てていくことが重要である。この思いに応えてデザインソリューションを提案することが専門家の役割となる。

作法―6

新しい施設に必要な機能を発見する

何のためにつくる施設なのかについて絶えず問い直し、次第に明確なイメージを紬だし、その目的のために必要な機能を既成概念にとらわれることなく、改めて発見すること。

いわゆる「箱もの」建築は、もう要らない。本当に必要な施設を無駄なくつくり、維持管理に過剰な負担がかからない建築づくりが求められている。何のためにつくる施設なのか？絶えず問い直し、その建築を通して、新しい市民の活動が育ち、使う人が元気になる空間づくりが求められている。そのためには、必要な機能や、使い方に関して多くの市民の参加による議論が重ねられ、身の丈に合った機能構成を探し出すことが重要である。

作法―7

行政の悩みを発見する

行政職員の立場を理解し、制度や組織の間で板挟みになっている彼らの悩みを発見することも計画の質を高めていく上で重要な作業である。行政職員の悩みに共感することで、職員と共に制度や官僚組織に立ち向かう事が可能となる。

問題の多くは、行政と市民の間に横たわる不信感にある。発見型ワークショップの場は、この不信感を信頼感に変えるコミュニケーションの場である。
行政職員の立場を理解し、制度や組織の間で板挟みになっている彼らの悩みを発見することも計画の質を高めていく上で重要な作業である。行政職員の悩みに共感することで、職員と共に制度や官僚組織に立ち向かう事が可能となる。

作法―8

まちの中にある人のつながりを発見する

地域は様々な人のつながりで成り立っている。地域に網の目のように存在する見えない人のつながりを発見し、施設の運営などに関わる人材のネットワーク形成へとつなげていくこと。

地域は様々な人のつながりで成り立っている。地域に網の目のように存在する見えない人のつながりを発見し、また、今までつながっていなかった相互のつながりを新たに作り上げることなどを通じて、施設の運営などにつながる人材のネットワークを形成する。

作法―9

まちの未来を発見する

建築やまちづくりの計画づくりのプロセスは、参加者それぞれがその地域の未来を構想することでもある。まちの未来の姿が共有されていないと、それぞれの計画はバラバラなものになってしまう。

建築やまちづくりの計画づくりのプロセスは、参加者それぞれが、その地域の未来を構想することでもある。まちの未来の姿が共有されていないと、それぞれの建設活動は、バラバラなものになってしまう。発見型ワークショップの場は、地域の将来のことを語り合う公共の場なのである。

作法―10

施設を活かした新しい活動を発見する

地域にとって、完成後、施設が活発に利用されることは最も重要なことである。施設の活用の中からこれまでになかった新たな活動が生み出されることが理想の施設づくりである。

地域にとって、完成後、施設が活発に利用されることは最も重要なことである。施設の活用の中からこれまでになかった新たな活動が生み出されることが理想の施設づくりである。
これらの活動は、施設づくりのワークショップの中でアイデアが出されたとしても実際に実現するためには施設が完成して後、何年かが必要になる場合もある。発見型ワークショップは、施設を使いこなす地域の力を生み出すものでなければならない。

作法―11

施設にふさわしい運営方式を発見する

計画の段階から施設運営の視点を忘れず検討すること。施設のハード面の検討だけでなく、参加者の中から運営組織の中心になる人材を見つけ出し、その地域ならではの運営方式を生み出すことが重要である。

建築は、使われることでその役割を全う出来る。従って竣工後の運営管理についても、出来るだけ早い時期から検討していくことが必要である。施設のハード面だけではなく、運営にあたり中心になる人材、運営組織の中心となる人材を見つけ出し、その地域、その施設ならではの運営方式を生み出すことが重要である。発見型ワークショップを通じて、中心となる人材の発掘も可能となる。